旭山動物園のいままでそしてこれから

動物園大好き人間の5人が語り合う――

旭山動物園の人気は、昨年もとどまることなく、まさにウナギのぼり。今年度の入場者は、夏期だけで百六十七万人と、すでに前年の年間入場者数を上回り、二百万人突破も現実的になってきました。観光客の増加はもちろん、関連グッズの発売や、宿泊施設の建設で、経済波及効果も相当なもの。旭山動物園は、まさに「旭川の至宝」となりました。しかし、永遠に入場者数が増え続けるわけではないでしょう。人気が一段落する時が、いつか必ずやって来ます。そんな将来をイメージしながら、旭山動物園の目指すべき「当面の完成形」とは、また理想の動物園像とはどんなものかについて、動物園大好き人間五人が語り合います――。

（司会・記録　柴田　貴保記者）

あべ弘士さん
1948年（昭和23年）6月19日生まれ。
元旭山動物園飼育係。絵本作家

――まず始めに、旭山動物園がどうしてこんなに人気になったのか、から話を進めたいと思います。九六年に入場者数が過去最低の二十六万人に落ち込んだ頃は、何が悪かったんでしょうか

安田　一九九六年は、ゴリラがエキノコックス症で死んだことが原因で、シーズン途中で閉園した年の翌年です。ただ、それだけが原因でもないと思う。一九六七年（昭和四二年）に旭山動物園ができて、ある程度の整備はしてきたけど、途中でやめちゃったんです。その結果、入園者が次第に減ると、今度は動物以外のものに頼りだした。ジェットコースターとか遊園地とか。そのジェットコースターもほかの遊園地から比べるとしょぼいもので。徐々に人気が落ちていった。その底が九六年。目新しいものが何もない状態だったからね。

――たしかにあの当時の動物園は行ってもつまらなかった。

安田　そう。私は市議会の一般質問で、若い人がデートする場所としての動物園が欲しい、と提案しました。例えば王子動物園（神戸）など、好きの色々な動物園に行くと、閉園時間のぎりぎりまで、カップルがデートしていたり、家族連れがいたけれど、旭山動物園にはそういう光景はなかった。魅力がなかったということですよ。

――多田さんは、その当時の動物園をどう見てましたか？

多田　私は、あまり入園者数とかは気にしていなかったんです。動物園が好きで、定期的に行っていました。

――多田さんが動物園に積極的に関わるようになったのはいつの頃からですか？

多田　九七年頃からです。「動物園のファンクラブを作りましょう」っていう声が仲間内から上がったんです。九八年ちょうど開園三十周年で、それをきっかけに、といって。聞いた話なんですけど、この時あたりから、小菅園長とあべさん、他の飼育員さんたちから「ファンクラブをつくりたい」っていう構想があったらしいんです。でも、それは園が主体になって運営するものではなく、市民が立ちあがったものならいい、という思いがあったそうです。たまたま報道関係に勤めている人台に、動物園に掲示板があり、そういう話が伝わってきました。それいえ、やりましょうよ、っていうことになったんです。

――星さんは、その当時の動物園の印象って、何かありますか？

星　全く意識もしていね（笑）。自分の仕事で精一杯だった。動物園自体の魅力はなかったですよね。そんなに行きたいところでもないし、誰かお客さんを連れて行こうという気持ちもなかった。行くとすれば春の花見。若い頃は、サークル活動をしてたから、よく花見にいった。そのついでに動物園みるくみたいな感じでした

（あべさん遅れて登場）

あべ　ごめんなさい。あさひかわ新聞の正月号の表紙を描いてたら、遅くなっちゃって…。

全員　爆笑

安田　それは仕方ないわ。

――あべさんが、動物園を辞めたのは、いつでしたっけ？

あべ　一九九六年（平成七年）の三月まで勤めていた。

――今、九六年に過去最低の入場者数になった頃は、何が原因だったのか？という話をしていたところです。

あべ　今もそうだけど、特に当時は、年間の入園者数は天候にもすごく左右されてたから。開園直後のゴールデンウィークに雨が降ったら、年間の半分の入園者が来ないことになってしまう。それと、エキノコックスの影響…。でも、一番は動物園そのものの老朽化。魅力的な動物がいても、魅力的な動物舎を作ることが不可能な時代がずっと続いていたからね。市民の足が自然と遠のいていたんじゃないかな。そしてね、何とかして客呼ばうということで、大型の遊園地を作った、我々飼育係は大反対だったけど。その遊園地自体も、だんだん魅力がなくなってきたんだろうなぁ。それでまたお客さんの足が遠のいた。でも私、リピーターがたくさんいたんよ、動物園ファンが。私たち職員もいろいろな試みをしていて、その努力を理解してくれているとは随分いた。あの頃は、お客も少なくてね、のんびりとしてたから。オレなんか毎日のようにガイドしていたなあ。幼稚園や小学校の児童生徒相手に。みんなオレの本「どうぶつえんガイド」（旭書館刊）を持って（笑）。お客はいないけどオレたちは仕事を楽しんでいたな。

安田　ゆっくり見れるっていう場が、今の動物園にないっていうのは、ちょっと寂しいですね。じっくり観察することも、今はできなくなってる。

星　ある時から、ビジネスに変わってしまった感じがありますね。動物園自体が変えたんじゃなくて、観光会社なんかが、何とか儲けたいと思ってガンガンいっちゃった。だから一日何十台もバスが来るようなことになった。子どもたちが行けないような動物園になってしまったら、ちょっと違うんじゃないかなと思いますね。

――いろいろな努力があって、旭山動物園人気が盛り上がっていらっしゃるんでしょうが、大きなきっかけは何だったんでしょう。

安田　一年に一個所、どこかをリニューアルする。そうすると、次の年、また新しいお客さんに来園してもらえるという発想のもとで、お金をかけてやってきたのが生きてきた。そして、口コミで広がった。少し調べてみたら、動物園や水族館を目的にしたツアーは、沖縄の「ちゅらうみ水族館」と旭山動物園くらいなんです。新しい見せ方・展示方法に、観光客らが反応してくれた、ということでしょうか。

星　実際に施設をいくら作ったって、伝えるということをしていない、入場者は増えないと思うんですよね。新しい施設の事や動物園の人や多田さんたちが、どういう思いでやっていったのか、少しずつ浸透していったんじゃないかな。

安田　テレビ局がべんぎんから広がって全国へ、でしょ。視察でいろんな所へ行っても、ちょっと違うしいと思うのが、旭山動物園は知っているけど、旭川の人間にあるっていうことは知らない、っていう言うんですよ（笑）。だから、必ず「旭川市旭山動物園」って付けてもらわないとね。

――世界中から視察に訪れていると聞きます。

安田　視察は多いです。各地の議員も毎日のように来ています。背広を着て見ているおじさん達がそうです。でも、旭山の真似をしてもなかなかいと思う。私も色んな動物園を視察してきました。多摩動物園に行って、オランウータンの綱渡りも見せてもらったけど、百五十メートルも高さがあって、オランウータンがちょっとかわいそうじゃないかなと思った。

多田ヒロミさん
1963年（昭和38年）8月8日生まれ。
NPO法人「旭山動物園くらぶ」理事長

――動物園人気にあやかって、このチャンスにもうけられないか、と考えるのが人情だと思います。でも旭川の人たちは、商売っ気があまりないように見えます。一方で、商売っ気がギラギラしていないからこそ、動物園人気が続いているとも思うんですが。

星　私は、ある居酒屋であべさんとお会いする機会があって、話をしているうちに、じゃあうちで作っているカボン（箱型の打楽器で、梅子などにも使える）にあべさんにデザインをお願いして「あべカボン」を作ろうということになった。また、「こんな細い木の端っこでも、うちは大事に使いたい」という思いがあべさんにお願いしようってことになった。そして、絵はあべさんにお願いしようってことになった。そして、パズルができた後、NPOの売店がでた後、お店の開店の朝の日に、わざわざあべさんに電話をいただいてね、「売店に置かないか？」って言われて、「あっ、そうですか？」って。そんな程度ですから、動物園人気を利用して、もうけてやろうとか、そういうつもりは全くないですよ。

――大野さんは、動物園との関わりはいつからですか？

大野　私は、エキノコックスの一件あたりからですね。こども牧場とか。

あべ　動物の看板あるでしょ、「ライオンのオシッコ」って。あいうのね、最初はオレたち職員が手作りでやってたんだけど、もうちょっといいモノが欲しい、それで少しずつ誰かにやってもらっているうちに、看板とか出会った。ほとんどタダみたいな値段でやってくれて。

大野　一番印象的なのが、「ことりの村」ができた時です。私は工事には関係なかったんですが、見ると、看板がなんにもないですね。入り口ゲートはあった。そこにどうして文字が入らないんだと思って見ていたんです。そうすると、それは図面にもなくて、お金がかかるからだ、というんです。オープンの確か二日前に、急きょ、「そこに『ことりの村』と言われた。それが今に印象的ですね。看板がないと、やっぱり格好がつかない、どうやってやろうかって話しあって、ベニヤ板と出会って、あの時が一番印象的ですね。

――本当にお金がなかったんですね。

大野　それはお金がなかったということじゃなくて、はじめから看板がない設計だったのかもしれない。なんでやらせていただいたものが設置されるっていうのは、非常に感動的でした。

――旭川信金本店（四ノ七）のディスプレイも手がけられました。

大野　私が好きだったと言うより、あべ先生の作品を手伝わせてもらったというこです。私もよく知らず大変失礼したんですが、あべ先生はいつも本当にやさしいんですよね。特に体が小さいんですよ。あべ先生の話をやっていると、動物園みたいな感じがするうちに、動物園の話が出てきて、動物園を街におろして来るようなものを作ってやるよって。ペンギンと北海道の森、森があってアンデスのラマ、ロシアのトラ、奥ペンギンとホッキョクグマ、アフリカのサバンナと、ジャングルのトラ、クロウがいてゲゲがいて。これから旭山動物園が作ろうとしている構想を、オレが先に作っちゃったかなぁ。